第６１号

会報　文化財保存新潟県協議会　2017年5月13日発行

１９年ぶりに開催される全国大会の準備が進んでいます･･･

文全協第48回新潟大会を多くの参加で盛り上げよう！

大会テーマ　「次代に引き継ぐ文化財保存運動」

2017年6月30日（金）、7月1日（土）、7月2日（日）

本会の母体である文化財保存全国協議会（略称、文全協）は、毎年全国各地で総会・大会を行ってきており、今年度は19年ぶりに新潟市で開催することになりました。思えば1990年代、新潟県内の古代遺跡で多くの貴重な木簡の出土があり、特に長岡市（旧和島村）八幡林遺跡は保存運動の結果、国指定史跡として保存されました。一方、弥生時代の高地性集落として話題を集めた上越市裏山遺跡は、地元市民を中心とした大きな保存運動もむなしく破壊されてしまいました。そうした中で開催された第29回新潟大会（1998年）では、「市民のための文化財保存－21世紀への展望－」をテーマに21世紀に向けた文化財保存のあり方を模索し、多数の市民が感動を共有しました。こうした一連の運動や取り組みは、その後の市民の遺跡への関心の高揚、行政による組織的な遺跡調査体制や博物館・資料館の整備､遺跡や発掘調査成果に触れる機会の増加などにつながったと考えます。

一方で、日本は超高齢社会を迎え、様々な分野での運動主体の高齢化、後継者不足が問題となっており、文化財保存運動においても同様です。そこで、今回の大会では「次代に引き継ぐ文化財保存運動」をテーマに、国民の財産である遺跡などの文化財、そしてそれを守り活用する文化財保存運動をどう次世代に引き継いでいくのかを考えていきます。ぜひご参加ください。

なお、文化財保存全国協議会第48回新潟大会実行委員会は、小林昌二実行委員長（本会運営委員、新潟市歴史博物館館長）、川上真紀子事務局長（本会副会長）を中心に約20名で構成されています。

※詳細は、同封した案内チラシをご覧ください。

貝塚遺跡の豊かな情報や被災地の現状を学ぶ･･･

「震災後の宮城県太平洋岸の遺跡を訪ねる旅」に参加して

北澤　優・木村帆高・三ツ井裕子・南日向子（新潟大学学生）

この度、新潟大学考古学専攻の学生として、橋本先生のご厚意で特別に文化財保存新潟県協議会の見学会、「震災後の宮城県太平洋岸の遺跡を訪ねる旅」（2017年11月26・27日）に参加させていただきました。見学地として、大木囲貝塚・七ヶ浜町歴史資料館、西の浜貝塚、里浜貝塚・東松島市奥松島縄文村歴史資料館、石巻市日和山公園、旧石巻市立湊第二小学校、浜田海蝕洞窟遺跡、東北歴史博物館といった場所を一泊二日の日程で回りました。非常に有意義な見学会となりました。その中でも特に印象に残った、大木囲貝塚・七ヶ浜町歴史資料館、旧石巻市立湊第二小学校、東北歴史博物館について、その感想を中心に述べたいと思います。

大木囲貝塚を散策

大木囲貝塚は、国史跡にも指定されている縄文時代前期前半から、後期初頭にかけて存在していた集落遺跡です。現在では史跡整備が進み、史跡公園と

七ヶ浜町歴史資料館で「大木式土器」を観察

里浜貝塚の貝層堆積状況（東松島市奥松島）

して一般に公開されています。きれいに整備され、歩きやすく、見学のしやすい場所で、春には桜が咲き、お花見スポットになっているとのことでしたので、ぜひその時期に見に来たいと思いました。そこに隣接されている七ヶ浜歴史資料館では、巨大な貝塚の剥離標本を見ることができました。貝塚の貝の集積状況から、層を判別し、いつの時期にどれだけの貝を採ったのか、またどのような種類を採ったのかを判別できると聞いていましたが、実際にその剥離標本を見ながらその集積具合をよく観察してみて、確かに層ができていると納得しました。なかなか実物を見る機会に恵まれなかったため、とても良い経験となりました。また、同資料館において大木式土器の１式から10式を順に並べた展示が印象に残っています。大木式土器は、縄文時代前期・中期の東北地方南部で盛んにつくられていた土器で、文様は渦巻きや波形など様々なものがあります。また、隣接する関東地方や、新潟地域、東北地方北部と相互に影響を与えていたと考えられています。新潟県で有名な火焔型土器は、大木７式と併行した時期に作られており、その文様の形から互いに影響があったのではないかといわれています。やはり、それらの違いは言葉で説明されるよりも、実物を見た方が分かるのは当然のことではありますが、こうしてすべての型式を並べて見ることができると、その共通点と相違点がよく分かります。その厚さ、文様の濃さ、材質等々、様々な比較をすることができました。東北地方の縄文土器を考える上での指標となる大木式土器の実物を見ることができたことは、大いに今後の参考となると思います。

被災文化財であふれる旧石巻市立湊第二小学校

次に旧石巻市立湊第二小学校は、2011年に発生した東日本大震災で被災した宮城県石巻市に位置し、その津波による被害のために廃校を余儀なくされた小学校です。未だ周囲には震災による津波の傷跡が残り、大きな建物などはほとんどなく、更地のままとなっていました。そんな旧石巻市立湊第二小学校ですが、現在は被災した文化財の臨時の収蔵庫として機能しています。勿論、元々の状態のまま収蔵庫として使うことはできないため、窓側には壁をもう一枚作って日光を遮ったり、室内に加湿器を複数配置し、湿度管理を行ったりして環境を整えておりました。また、場所が足りないために、元々のトイレも改造をして文化財を収蔵しておりました。全国どの博物館も文化財の収蔵や管理が追い付いていないという現状を鑑みると、致し方ない処置であると分かってはいるものの、きちんと専用に作られた場所や施設に移動されることを願っております。また、文化財保存とは別になりますが、強く印象に残っているのは、小学校が震災時の状況を未だ残していた点でした。黒板には震災当時の日付とともに、自分の所在地や、移動先を告げる伝言、また自分の無事を知らせるものも残されており、震災時のその時間まで行っていたのであろう授業の内容が黒板に残されていました。自分の出身地である栃木県では、震度５強の揺れに襲われ、塀が崩れる、停電する程度の被害で済みましたので、テレビの中でみた宮城や福島の被災状況はどこか映画やドラマを見ているような気持でいましたが、これを見てしまうとその被害の現実を

強く意識させられました。また、そこに行く前に登った日和山公園から見る石巻の光景は、震災から５年もたった、ではなく５年しかたっていない、ということを無理やりにでも認識するしかありませんでした。文化財保存という観点でもこの見学地は重要でありましたが、震災による被害の状況を、テレビなどのメディアを通したものではなく、実際に見て、現実として知ることができたという意味で、もしかすると今回の見学会で最も大きな経験であったかもしれません。ともあれ、これで東日本大震災、また、最近発生した熊本地震など、災害に向き合う被災地のことを他人事としてスルーすることはできなくなってしまいました。具体的に何ができるか、今の自分ではわかりませんが、とにかく、今回の経験を忘れず、風化させず、考え続けることに決めました。

続いて、東北歴史博物館では、企画展と常設展の一部を見学しました。企画展では、クジラと日本人に関する展示を行っておりました。それはクジラが日本人の生活といかに密接にかかわっているか、文書や出土した道具、クジラの骨や絵、また、現代のおもちゃや広告などを幅広く展示していました。クジラと言えば、近年はその漁に関しての規制が国際的に厳しくなっており、もしかするといいイメージを抱いていない人が増えているのかもしれません。そんな状況だからこその展示だったのかとも思われますが、日本人が古くからクジラを食し、その骨、髭、油などのあらゆる部位を様々な場面で活用して生活していたことがよく分かりました。私自身、クジラを食べた経験は数えるほどしかありませんし、そこまでなじみ深い物ではありませんが、それでも、日本の食文化、また工芸などとのかかわりの中においてクジラがいかに重要なものであったのかがよく分かりました。特に印象に残るのは、江戸時代のクジラ漁の様子を描いた絵で、そのクジラにたくさんの小舟で立ち向かい、入れ代わり立ち代わり銛を突き立てる姿でした。いくつかの船はヒレでうたれたのか、壊れて人が海に投げ出されていて、当時命がけでクジラに立ち向かっていたのだということがよく分かりました。それだけの価値があったということなのでしょう。前述したように、近年では厳しい状況にあるクジラとのかかわりではありますが、そういった点も含めて、これまで通りとはいかないまでも、共存できる良き関係を模索していければよいと思います。

常設展では、旧石器時代から現代まで、民俗事例を含めた幅広い展示を行っていました。時間に余裕がなかったためにすべてを見ることはできず、多少速足での見学になってしまったことが後悔ではありますが、しかしその展示規模に圧倒されてしまったのも確かです。展示の中で特に驚いたのは、古墳時代の展示の中にあった等身大ほどもある大きな人物埴輪で、これまで数値としてそのくらいの大きさの埴輪があったことは知っていましたが、実物を見てみると、やはりそのサイズには驚きと興奮を隠すことができませんでした。このサイズの埴輪が、一体どのように古墳に飾られていたのか、また、通常と同じように周囲に並べられていたとするならば、同じサイズのものが数十点も並ぶ古墳であったのか、その姿を想像すると、当時の人がいかに古墳を丁寧に飾り、手間をかけたのかがよく分かります。以前中国の兵馬俑を見たときもその迫力に驚きましたが、それに負けず劣らない威容であったことでしょう。また、全体として展示が分かりやすいように精巧な模型が複数設置してあり、なるほど、当時はこのような姿かたちでこの場所にあったのかと、新鮮な驚きがありました。例えば、多賀城の復元模型だったり、近世の仙台の街並を表現したものだったり、他にも民俗資料的な、昭和期の家屋や商店を再現したものや、道祖神を表す藁で作られた巨大な鬼のような模型もありました。博物館として、見て、聞いて楽しめる、また学ぶことのできる良い施設であったと思います。その他、今回は特別に、東北歴史博物館のバックヤードを見せていただくことができました。普段は見ることのできない収蔵庫や文化財搬入口、ＣＤ，写真といった様々なメディアの記録をどのように保存するか、企画展の準備の様子など、正面から入ったのではなかなか知ることのできない部分を見学させていただきました。文化財の保存は、

東北歴史博物館の展示も堪能

博物館の重要課題であり、考古学を学ぶ自分としても、無視することのできない分野になります。そう言った部分を学ぶ良いきっかけになったと思います。これまで表面しか見てこなかった博物館という場所について、今後はより深く、そして丁寧に見ていかねばならないと思いました。

今回の機会で、いくつもの重要な遺跡や資料館、また被災地を回ることができました。なかなか個人では金銭的にも場所的にも行きにくい場所でありましたので、今回このような機会をいただけたことを大変感謝しております。また、皆様のご厚意で、学生の参加費用の方を安くしていただき、本当にありがとうございます。今回の機会を無駄にすることなく、今後もこれらを学業その他さまざまな場面で生かしていきたいと思っております。今回参加した学生を代表して、お礼申し上げます。ありがとうございました。

【事務局より】２日間ご案内いただいた東北歴史博物館の古川一明さん、各地でご説明いただいた現地職員の方々にあらためてお礼申し上げます。

【参加者の感想】

〇両日とも風雨にたたられることなく、快く過ごせました。27日の朝の日和山公園で出会った男性のことが頭から離れません。亡くなった奥様を思うと、毎日、日和山公園まで足を向けておられるとか。震災を、本当に身近に感じました。文化財の保存と活用のため、多くの方々が大変な苦労をされながら、一歩一歩進めていることを膚で感じることのできる良い旅でした。大木３－４式と巻の豊原遺跡の一部表採物がとても似ており、やはり、本物（実物）に触れるのは大切と思いました。

〇現地の方々の懸命な姿と丁寧な解説に心を打たれました。二日間ガイドを務めてくださった古川さんのお話しもわかりやすかった上、普段なら見ることができないバックヤードまで案内していただけるなど、文新協ならではの、知的好奇心の尽きない旅だったと思います。ただ、今回ある意味で最も印象に残ったのは、日和山でお話してくださった現地の方の体験談でした。言葉を失いました。他者の痛みにもっと敏感にならなければならない…と日頃の自分を振り返り、考えさせられました。

〇貝塚にあれほど情報が詰まっていることを知りませんでした。七ヶ浜は耕作で残念ながら住居跡が消滅しているようです。一ヶ所で土器の変遷が知れて大変良かったです。奥松島、館長さんの思いが伝わってくる説明で、もっと時間をかけまわりも見たいと思います。二日目の、被災後の保存という課題に大変な努力をされていることが分かりました。今までと一味違った旅でした。

〇ふつかかんありがとうございます。たのしかったです。（最年少参加者、小学生の感想です。事務局注）

〇子供を伴ってのはじめての参加で不安もありましたが、皆様に温かく見守って頂きありがとうございました。大震災のつめあとはテレビや新聞では見ていましたが、改めて実感することが出来ました。５年たった今でも震災の恐ろしさ、破壊力のすさまじさを文化財を通しても見ることができました。

〇役に立たない。ゴミと聞かされていた貝塚が、実は情報の宝庫とは驚きました。日本海側には貝塚は少ないと思いますが、墓のあり方や文化の違いを認識し、大変有意義な旅でした。

編集後記

19年ぶりの文全協大会開催に向けて、これまで４回の実行委員会を重ねてきました。小林昌二実行委員長（みなとぴあ館長）を中心に、文新協の運営委員や有志が集まり、準備を進めています。大会への参加はもちろん、実行委員としてお手伝いいただける方は、ぜひとも事務局までご一報ください。遺跡を愛する全国の人たちが新潟に集います。「48回大会で新潟」だから“４８ＮＧＴ”なんて略すと、アイドルグループみたいですね（笑）。彼女たちに負けずに、みんなで新潟大会を盛りあげましょう。

この『会報』は文全協会員でなくても、文新協行事に参加された方には可能な限りお送りしています（ご参加なき場合は郵送を取りやめる場合があります）。名簿は本会からの連絡にのみ使用し、個人情報保護に留意し厳正に管理しています。会報送付がご迷惑な方は事務局までご一報下さい。

文化財保存新潟県協議会事務局（入会についてのお問い合わせも）
電話：090-2735-5536
Ｅ－ｍａｉｌ：bun-sin-kyou@js8.so-net.ne.jp
ホームページ：http://www014.upp.so-net.ne.jp/bunsin-k/

文全協のホームページもぜひご覧ください。